

## 子どもの反抗

— イルムガルト・コインの小説『子どもたちが一緒に遊んではならなかった女の子』—

武田良材

### はじめに

イルムガルト・コイン<sup>1</sup> (Irmgard Keun 1905-1982) といえば、ヴァイマル共和国時代の「新しい女性」<sup>2</sup> が描かれているとされる『ギルギ — ふつうの女の子』<sup>3</sup> (1931、以下『ギルギ』) および『化繊の女の子』<sup>4</sup> (1932、以下『化繊』) か、ナチス・ドイツ下の市民を活写した『真夜中過ぎ』<sup>5</sup> (1937) が主に取り上げられる。しかし彼女には、それらよりも広範に読まれているとされる長編小説がある。それは『子どもたちが一緒に遊んではならなかった女の子』<sup>6</sup> (1936、以下『女の子』) である。

『女の子』は今の子どもたちにも痛快な読み物として楽しまれているようである。<sup>7</sup> 他方『ギルギ』や『化繊』のほうも、まだ古臭くなってしまったとはいえない。小道具に使われたラックスの石けんやニベアクリームは、今なお定番商品で、作品世界と読者との間の親近感を保ち続けているし、作品に描かれた女性像も、もはや新鮮でないには違いないが、古臭いというよりは、

<sup>1</sup> コインを日本語で紹介したものには右のものがある。田丸理沙「イルムガルト・コイン — ワイマル共和国末期に現れたベストセラー作家」：ゲルマニスティネンの会 編『ドイツ文化を担った女性たち — その活躍の軌跡』鳥影社・ロゴス企画 2008 年、78~95 頁所収。同様のものとして、ユルゲン・ゼルケ『焚かれた詩人たち — ナチスが焚書・肅清した文学者たちの肖像』(浅野洋 訳) アルファベータ 1999 年が幼ねてより知られているが、こちらはコイン本人の主張をそのまま記し、事実と反する部分が多い。

<sup>2</sup> コインに関連付けられることの多いテーマである。包括的に論じたものを挙げておく。Haunhorst, Kerstin: *Das Bild der neuen Frau im Frühwerk Irmgard Keuns. Entwürfe von Weiblichkeit am Ende der Weimarer Republik*. Hamburg 2008.

<sup>3</sup> Keun, Irmgard: *Gilgi — eine von uns*. Berlin 1931. 副題を直訳すると「わたしたちのうちの一人の女性」。

<sup>4</sup> Keun, Irmgard: *Das kunstseidene Mädchen*. Berlin 1932. 直訳すれば『人絹娘』だが、定訳がない。ここでは人絹 (レーヨン) が、主人公が盗んで逃げる毛皮のコートと対比されているのを踏まえ、本物でないというニュアンスのある「化繊」という言葉を用いた。

<sup>5</sup> Keun, Irmgard: *Nach Mitternacht*. Amsterdam 1937.

<sup>6</sup> Keun, Irmgard: *Das Mädchen, mit dem die Kinder nicht verkehren durften*. Düsseldorf 1980 [Amsterdam 1936]. 本稿ではこの小説からの引用頁を [1] のように記す。

<sup>7</sup> 小学校の教材に取り上げられたりしている。ちなみに読者にはこの作品から、幼い女の子の活躍する読み物として、アストリッド・リンドグレンの『長くつ下のピッピ』(1945) を連想する者が多いが、コインの小説のほうが先行する。

ふつうの少女と受け止めることができる。それに『真夜中過ぎ』に描かれた、卑俗な大衆心理は、不滅ではないかと思われる類のものであって、コインの洞察には、現代人も舌を巻かされるところがあるといえよう。ただこれらは、1920年代の「新しい女性」を描いた傑作、あるいはナチス・ドイツの大衆心理を描いた傑作という枠組みを取り払って評価しようとする、その後の様々な作家たちの多種多様な小説に埋没しかねないところがある。鮮度を保ち続けているという意味では『女の子』に及ばない。

この『女の子』は、小学生程度の同一の子どもを主人公とする短編小説をまとめて長編小説にしたものである。第一次世界大戦辺りの特殊な時期が舞台に設定されているが、いけないとわかっていることをしてしまう子どもの心理や、大人たちに対する子どもの思い、そうした普遍的なものを描いた物語として、2つの世界大戦をよくは知らない児童たちをも引き付ける力を保ち続けている。

この小説はコインの亡命第1作となったが、ドイツ国内での出版を念頭に亡命前に執筆され、章の1つは実際、亡命前の1935年10月にハノーファー新聞に掲載されていることから、基本的に亡命文学としては扱われない。書籍としての出版が亡命中なので、「国内亡命」の文学にも組み入れ難い。「新しい女性」は描かれていない。そうしたことから、戦後唯一の長編小説『優しいフェルディナント』<sup>8</sup> (1950) と並び、コイン論から抜け落ちがちな作品となっている。コイン文学全体に照明を当て、全長編小説にそれぞれ1章を割り当てた Stephanie Bender の『イルムガルト・コインの長編小説における人生設計』<sup>9</sup> (2009) でも、亡命小説を扱った第3部の第2章を『女の子』に割いてはいるが、それでいて作品論としてはこれについてだけ第2節以下を欠く短さとなっている。亡命中に執筆・出版された『急行三等車』<sup>10</sup> (1937) はコイン作品のなかで「最低の小説」<sup>11</sup> という評価が定着しているが、それでも『女の子』以上には議論の対象となってきた。『女の子』が軽視されてきたのは、作者がナチス・ドイツでの出版を目指していたがゆえに、子ども向けの政治的に無難な小説とみなされてきたことが一因かと考えられるが、この作品が単なる子ども向けの読み物にとどまらず、亡命作家が世に問うにふさわしい政治的な小説であったことを示すのが本稿のねらいである。

<sup>8</sup> Keun, Irmgard: *Ferdinand, der Mann mit dem freundlichen Herzen*. Düsseldorf 1950.

<sup>9</sup> Bender, Stephanie: *Lebensentwürfe im Romanwerk Irmgard Keuns*. Taunusstein 2009.

<sup>10</sup> Keun, Irmgard: *D-Zug dritter Klasse*. Amsterdam 1937. この作品については拙稿を参照のこと。武田良材「コインの亡命小説の風刺について — 長編小説『急行三等車』をめぐる議論を中心に」：京都大学大学院独文研究室『研究報告』第24号（2010年）、141～156頁。

<sup>11</sup> Lughofer, Johann Georg / Zalaznik, Mira Miladinovic (Hrsg.): *Joseph Roth. Europäisch-jüdischer Schriftsteller und österreichischer Universalist*. Berlin / Boston 2011, S. 162.

## 1. 出版をめぐる

まずは『女の子』の成立および出版の経緯をまとめておく。<sup>12</sup>

『ギルギ』、『化繊』に続く3番目の長編小説として、コインは一家の没落を主題とする作品を準備していた。これには英米やオランダの出版社も注目していたが、国民社会主義ドイツ労働者党 (NSDAP) による政権が誕生し、没落という主題が国民社会主義の国家建設にそぐわないとの指摘を受ける。1933年8月にはプロイセンおよびバイエルンで『化繊』が押収され、10月には廃棄される情勢にあり、これでは新作は出版社の自主検閲に引っかかってしまうので、コインは準備していたこの作品を破棄する。

1933年から1934年にかけては新聞や雑誌に短い作品を掲載できたものの、ときには出版社側が勝手に表題と著者名を変えてしまうなど、コインの威光は消え失せてしまっていた。この時点まではあくまでも出版社側の慎重な判断による自粛的措置であったが、1935年4月には『ギルギ』と『化繊』の双方が、帝国著作権院の「有害で好ましくない図書のリスト」に載り、コインの文学は公的に否定されてしまう。このように追い詰められた1935年に『女の子』は執筆された。

先述の通り、その内の1話「暴走悪党団」が同年10月にハノーファー新聞に掲載されている。これは小学校3、4年生程度の子どもが主人公の、子どもじみたいたずらの話で、検閲に抵触する内容ではなかった。コインは翌1936年1月に帝国著作権院に入会を申し込んでおり、『女の子』がドイツ国内でも出版可能なように書かれたことは明らかである。ちなみに「わたしがバチルス保菌者だったとき」という話には、意図的な罹患で前線行きを逃れようとするドイツ軍兵士が登場し、これは明らかに国民社会主義にそぐわないが、この1話だけは1959年の版から追加されたものである。

他方で、アムステルダムの出版社アレルト・デ・ランゲでドイツ語部門をヘルマン・ケステンと共に担っていたヴァルター・ランダウアーは、1935年2月からコインに手紙を送って亡命を勧めていた。コインは亡命を望まず、国内での作家活動を模索し続けたが、『女の子』をフランクフルト新聞に連載する試みが1936年2月半ばに頓挫し、同月末にアレルト・デ・ランゲ社から契約条件の提示を受けると、同年4月に契約した。契約書では、『女の子』とその次の長編小説、すなわち1935年末には着想されていた『真夜中過ぎ』、および『長編小説の書き方』という3冊の本を出し、『女の子』への前払いとして500グルデン、さらに月毎に150グルデンが支払われることになっていた。契約交渉を進めたランダウアーにとっての本命は、ナチス・ドイツを

<sup>12</sup> コインに関する伝記的記述は、主に次の4つの文献を参照している。Häntzschel, Hiltrud: *Irmgard Keun*. Reinbek 2001. Kreis, Gabriele: *Irmgard Keun. „Was man glaubt, gibt es“*. München 1993. Keun, Irmgard: *Ich lebe in einem wilden Wirbel. Briefe an Arnold Strauss. 1933 bis 1947*. Hrsg. v. Gabriele Kreis und Marjory S. Strauss. München 1990. Keun, Irmgard: *Bilder aus der Emigration*. In: Dieselbe: *Wenn wir alle gut wären*. Köln 1983, S. 129-157.

描く「次の長編小説」の出版権であったが、それにしても『女の子』は上述の通り、亡命か否か、のせめぎ合いの最中に成立し、亡命への切符の役割をも果たしたのだった。

亡命の条件を整えたコインは、1936年5月にドイツを出国し、家族で旅行した思い出があって物価の点で滞在費も節約できるベルギーのオーステンデに滞在した。亡命の始まりはコインにとってドイツからの解放の意味合いが強く、この時期は国民社会主義について書くことを避けていたので、『女の子』に亡命という事態を受けての変更が加えられたとは考えがたい。この小説はそれからまもない7月に出版された。年末までにわずか2065部、それもほぼオランダ国内でしか売れず、翻訳権もオランダとノルウェーでしか売れなかった。1937年2月に登場し、亡命作家としてのコインを世界に知らしめた「次の長編小説」、つまり『真夜中過ぎ』が好評を博し、瞬く間に各国で翻訳されたのと対照をなす。ちなみに、反ファシズムを志してドイツ語部門を設けた社主が1935年に亡くなり、依然としてドイツで営業していた出版社側の政治的配慮から、『真夜中過ぎ』は契約内容と異なりアレルト・デ・ランゲ社からは出版されなかった。

『女の子』は、第二次世界大戦後のドイツ国内でのラジオドラマでは好評で、それを受けてケルンのライン新聞にも1948年9月から11月にかけて連載され、その後も順調に版を重ねた。コイン研究の分野であり取り上げられないのとは裏腹に、最もよく読まれているコイン作品となっている。逆に、亡命中に最もよく売れた『真夜中過ぎ』が戦後は、1946年8月から11月にかけて新ベルリン絵入り新聞に連載はされたものの評判が芳しくなく、ようやく1956年に東ドイツで、1961年に西ドイツで出版された際も大した反響がなかったのと対照をなしている。作家コインを扱うときに『真夜中過ぎ』ばかりを持ち出し、『女の子』を軽んずるのは、この点からも不適切といえる。

## 2. 『女の子』をめぐる議論

ヴァイマル共和国時代の作品ではなく、亡命文学にも含められない『女の子』は、コイン文学をめぐる議論からこぼれ落ち、ヴァイマル共和国から亡命時代までを論じる場合にも、『化繊』から『真夜中過ぎ』まで話題が飛び、この作品については簡単に紹介される程度であった。

Stephanie Waldow も「意識的に言葉を用いた語りとしての子どもらしい言葉づかい——ヴァルター・ベンヤミンと共に読む『子どもたちが一緒に遊んでいなかった女の子』」<sup>13</sup> (2005)の冒頭で、『女の子』が伝記を語るうえでの背景知識としてしか言及されず、ほとんど研究の対象と見られてこなかった事情を上記のように指摘している。ところで、ベンヤミンがコインを論

---

<sup>13</sup> Waldow, Stephanie: Kindlicher Sprachgestus als sprachreflexive Erzählform. *Das Mädchen, mit dem die Kinder nicht verkehren durften* gelesen mit Walter Benjamin. In: Arend, Stefanie / Martin, Ariane (Hrsg.): *Irmgard Keun 1905/2005. Deutungen und Dokumente*. Bielefeld 2005, S. 145-181.

じたことはない。議論すべき先行研究が乏しいことが理由の1つかと考えられるが、Waldow はベンヤミンの論考「言語一般および人間の言語について」<sup>14</sup> での「言語は事物の言語的本質を伝達している」といった命題を出発点に、それに続く人間の言語の特質たる「名付け」に関連しそうな箇所を、『女の子』から拾い出してみせる。子どもらしさの表現について理解が深まる利点はあるが、その形而上学的議論がここで適切かは疑わしい。また言葉習得の途上にあつてナイーブな子どもという設定で、口にのぼる言葉とは裏腹な内容を読者に伝えるコインの技術を、Waldow は高く評価する。<sup>15</sup> 確かに子ども時代の実際の体験がふんだんに盛り込まれているという側面はあるだろう。現実味ある子どもの発想や、コインの伝記と重なる内容、<sup>16</sup> 処女長編小説と似通った描写<sup>17</sup> や出来事<sup>18</sup> からそのように推測される。<sup>19</sup> しかし主人公の少女が本当の子どもらしくはないことは既に指摘されており、<sup>20</sup> さらに Waldow もコインの描く子どもを設定として理解するのであれば、主人公を本当の子どものミメシス（模倣）とみなす前提でのベンヤミンの議論の適用は妥当かどうか疑わしい。後述するように、子どもらしさが、皮肉で巧みな小説家コインの緻密な計算によって、大人の身勝手さを暴露する方向に展開し、子どもを手段に大人を風刺しているという前提に立つならば、Waldow の姿勢は肯定しがたい。

Liane Schüller の『石の下は秘密だらけ』イルムガルト・コインにおける子ども<sup>21</sup> (2011)

<sup>14</sup> Benjamin, Walter: Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen. In: *Gesammelte Schriften. II-1*. Frankfurt a.M. 1991, S. 140-157. 細見和之『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』岩波書店 2009 年を参照した。Waldow はベンヤミンのその他複数の著作から引用するが、内容はこの論考に沿っている。

<sup>15</sup> 『化繊』に即したナイーブさの議論はある。Stockinger, Claudia: „daß man mit ein bißchen Nachdenken sich vieles selber erklären kann“. Irmgard Keuns Verfahren der reflektierten Naivität. In: Arnold, Heinz Ludwig (Hrsg.): *TEXT+KRITIK. Heft 183. Irmgard Keun*. Göttingen 2009, S. 3-14.

<sup>16</sup> 次節でその一部を指摘する。

<sup>17</sup> 『ギルギ』で、自宅居間のソファの上に縁取りされた布が貼られていて、その布のモチーフであるワシントンがシーツ大の旗を手に嵐に揺れるボートに直立する姿を皮肉る描写がある。『女の子』の「わたしは不安」では、主人公のベッドの上に「海の上のわが主イエズス・キリスト」と題する絵があり、イエズスの衣服が他の男たちのものと全く違うところに注目が向けられ、その「剣のように見事な衣」をめぐる皮肉めいた空想が展開される。家具の上の絵に向けられる視線と、うがった見方が共通している。

<sup>18</sup> 『ギルギ』ではベティおばさんが、娘を 2 人連れてハンブルクから、ケルンのカーニバルを見物しに来る。『女の子』の「真実を創作する」では、ベティおばさんが、娘を 1 人連れてアウエルバシムから、聖霊降臨祭を見物しに来る。どちらのおばさんといとも同じく鬱陶しい人物たちとして描かれる。

<sup>19</sup> コインは、オーステンデでの亡命生活について書いたものを除いて、自伝を残していない。弟の年齢を騙っていたうえ、第一次世界大戦との関係ではわずかな年齢差も大きな体験の違いを生じさせたので、とくに子ども時代を回想することは彼女にとって難しいことだった。ちなみに年齢を偽ったのは、1923 年に知り合い、後に夫となった俳優兼演出家のヨハネス・トラロウの助言を受けてのことである。

<sup>20</sup> Marschewitz, Ingrid: *Irmgard Keun. Leben und Werk*. Würzburg 1999, S. 123.

<sup>21</sup> Schüller, Liane: „Unter den Steinen ist alles Geheimnis“. Kinderfiguren bei Irmgard Keun. In: Ackermann, Gregor / Delabar, Walter (Hrsg.): *Schreibende Frauen. Ein Schaubild im frühen 20.*

は、まさにそうした前提から『女の子』の子どもを論じている。Schüller の問題意識は、前 2 作品と違い語り手が幼く設定されたのが、厳しい政治状況を顧慮した無難な選択なのかということと、2 年後の『万国の子』<sup>22</sup> (1938) で語り手にされた同様に幼い少女との間に世界観の違いがあるのかどうかということである。<sup>23</sup> Schüller は子どもを主人公とする同時期の別の作者の物語と比較しつつ、小説の読者に自己批判を求めるコインの傾向や、何かにつけて卑近なものに例えて理解する脱神格化など、個々の風刺的描写を指摘する。他方で『女の子』では戦争が物語の背景に過ぎないとして、亡命者として居場所の喪失という危険に晒されている『万国の子』との違いを強調する。子どもについての評価は次の通りである。

コインにおける子どもには、仮面を剥いでゆく素朴な朗らかさがある。子どもという衣装をまとうことで作者は、道化師と同様の、悪口を言う自由を獲得し、それを巧みに用いている。<sup>24</sup>

コインが子どもに託した役割、そこからの大人への批判的眼差しに関する Schüller の考察は的確である。ただしこの小説に着目する限り、女性への敵意ある態度は無視しがたく、戦争というテーマについても多少踏み込んで考えなければ、この小説の政治性は評価しがたい。ところが政治性について Schüller は『真夜中過ぎ』または『万国の子』に話題をそらし、コインの手になる子ども像を多彩に持ち出すことで、コインの描く子どもに政治性があると印象づける手法をとる。<sup>25</sup> 本稿では『女の子』の分析に絞り、『真夜中過ぎ』および『万国の子』については稿を改めることとするが、『女の子』そのものが亡命作家コインにふさわしい、十分に政治的な小説であることを示し得るというのが筆者の考えである。

### 3. 物語の概要

『子どもたちが一緒に遊んではならなかった女の子』は、以下の短編小説を束ねて一本の長編

---

*Jahrhundert*. Bielefeld 2011, S. 311-325. 「石の下は秘密だらけ」[79] は『女の子』の「わたしがバチルス保菌者だったとき」に登場する表現。石を取り除けたときに隠れていた植物や虫たちが解放されるが、石をひっくり返す前に何が起きるかを予見することはできない。予見できなかった事態とはそのようなものだと主人公が語る。小説では、何も悪いことをしていないのにバチルス保菌者となったことを指している。

<sup>22</sup> Keun, Irmgard: *Kind aller Länder*. Amsterdam 1938.

<sup>23</sup> 筆者は後者の問いを『万国の子』論として稿を改めて取り上げたいと考えている。

<sup>24</sup> Schüller, S. 323.

<sup>25</sup> 『真夜中過ぎ』の主人公は幼くないので、ヒトラーに花束を渡す役となった少女ベルトヒェンの挿話が取り上げられている。

小説とした作品である。主人公は10歳前後の同一の少女で、名前は明かされない。<sup>26</sup> 女性教師ばかりの女子校に通っている。一人っ子だが、母方のミリエおばさんも加えて4人暮らし。途中から家政婦が加わる。隣に住み、戦争で片腕となったクライネルツ氏が、子どもの理解者を演じる。

**わたしの最初の遺言 (Mein erstes Testament)** 主人公と同級生たちは担任から校長先生が亡くなったと聞かされる。そこで主人公が大人の会話を真似して死因を尋ねたところ、死者への冒瀆を理由に、1人だけ埋葬への参列を禁じられる。主人公はクライネルツ氏に手伝ってもらい、担任と2人の同級生が自分の埋葬に参列することを禁ずる遺言書を作成する。

**暴走悪党団 (Die Horde der rasenden Banditen)** 主人公はこの秘密集団の2番手。1番手はヘンスヒェン・ラクスで、彼の父親はギリシャ語を教える教授。3番手はオットヒェン・ヴェーバーで、父親は医師。この付き合いからも主人公の家庭の社会階層が知られる。<sup>27</sup> さらに年下の子が5名。同級生の母親が彼らの活動をそれぞれの親に告げ口したので、この母親を脅かそうと人間の頭蓋骨を彼女の家の居間に放り込む。

**神の道具 (Das göttliche Werkzeug)** 気に入らない子に、神がいつになっても罰を下さないのに業を煮やした主人公は、洗濯用の青み剤 (Waschblau)<sup>28</sup> を振りかけて、その子の全身を真っ青にする。神に代わって天罰を下したので神の道具。コルセットを着けさせられるところは、作者自身の体験を反映している。<sup>29</sup>

**新しい子ができた (Wir haben ein neues Kind)** 弟ができて、父は跡継ぎだと大喜びする。それを見て主人公はしょげ、優しくしてくれた亡き祖母の墓を探しに墓地へ行く。コインの父親は事業を継いでくれる男の子に期待していて、長子が作者であったことに少なからず失望し、弟の誕生に大喜びした。その体験を反映している。

---

<sup>26</sup> 友だちは基本的にフルネームで紹介されるが、家族の名前も母親や弟については明かされない。Schüllerは『ギルギ』などの場合と比較している。Schüller, S. 313.

<sup>27</sup> 「優雅な人たちと馬糞」に、「わたしたちも金持ちだけど、すぐくではない」、「わたしと同じの階層の他の子どもたちは皆ずっとすてきな身なりをしているけど、わたしは気にしない」とある。

<sup>28</sup> 洗濯の際に青みをつけて、白さを際立たせる。

<sup>29</sup> Kreis, S. 23f. 何か見つからないかと下ばかり見ているコインに、父親がランドセルのような金属製の姿勢矯正器を与え、それをつけて通学するよう命じた。作中でもそのように描かれている。

**皇帝への手紙 (Wir schreiben an den Kaiser)** 建築中の家が潜水艦ごっこもできるほど水浸しになった事件でも真っ先に疑われるほど、「近所のペスト」として有名なヘンスヒェン・ラクスと主人公は、新聞に載った立派な男の子の真似をして、皇帝に手紙を書くことにする。あまりに個人的でとりとめのない内容が長大に書かれるが、戦争にからむ言及が多い。この件で父親たちは警察に毎日出頭させられる。手紙が勝手に読まれたと、皇帝に直訴する旅費を手に入れるために主人公はサーカスの熊と戦うが、その熊は栄養状態が悪くたちまち衰弱死する。

**わたしがバチルス保菌者だったとき (Als ich Bazillenträger war)** 弟が猩紅熱にかかり、主人公もバチルス保菌者として他人との接触を避けたいといけないうきに、休暇中の兵士たちと仲良くなる。ときは1918年で、もうすぐ戦争が終わるのに前線に送られたくない、と考える兵士たちは、猩紅熱にかかることを熱望する。先述の通りこの話だけ1959年版より加えられた。

**わたしは不安 (Ich habe Angst)** 生徒への「指導 (Tadel)」が3回累積するたびに、親が学校に呼び出されるきまりである。呼び出しを既に2回受けている主人公は、次を避けるため、「指導」を記録しているクラスノートを盗み出して地中に埋める。心ならずもクラスの子に話してしまい、その子の母親にも伝わり、万事休すかというところで休戦が知らされてうやむやになる。

**優雅な人たちと馬糞 (Die feinen Leute und die Pferdeäpfel)** 家具に差し押さえの札が貼られてしまう。そのとき父親の工場に転入れするために、金持ちのミッターダंक家が引っ越してきて、一家を高級ホテルの昼食に招待する。一方で、暴走悪党団の仲間たちは、凶犬マリアに襲われたくないので、その犬の飼い主になりたがっていたが、飼い主の出した条件が馬糞を一番たくさん集めることで、主人公は昼食の場を抜け出して馬糞集めに駆けつける。昼食後の両親とおばとミッターダंक家の人たちは、ミッターダंक家の屋敷が立つ場所を下見に来て、馬糞の山に身をつっ込んでしまった主人公に会う。コインの父親の会社の共同出資者だったクローゼベルク家が、ケルンに引っ越してきたときの体験に基づくと思われる。<sup>30</sup>

**真実を作り出す (Ich zaubere Wahrheit)** 父方のおばといとこが泊まりがけで訪ねてくる。歓迎のパーティで、主人公もプンシュ (パンチ酒) を飲むことをゆるされる。彼女は酔ったふりをして、おばが悪意に満ちた陰口を散々たたいたと述べた。いつも嘘ばかりついて本来は全然

---

<sup>30</sup> コインの父親が1913年に設立した会社、ケルン・ガソリン精製有限責任会社 (<http://www.cbronline.de>) は、設立資本金をルドルフ・クローゼベルクと折半したが、父親がベレルリンのクローゼベルクの会社から独立した形であり、クローゼベルクのほうが立場が強かった。

信用のない主人公は、酔えば正直に打ち明けているに違いないとみなされる。おばたちはその晩のうちに退散した。

**結婚なさい、ミリエおばさん** (Tante Millie soll heiraten) ミリエおばさんは、新聞を通じて結婚相手を募集する。広告文で四十路と明かされる。釣り合いのとれた中年男がミリエおばさんを気に入るが、おばさんは文通することのできた若い男のほうに気持ちが向いて、その男と会うことになる。早く結婚して出ていってもらいたい主人公は、箔をつければ後押しになると考え、待ち合わせの店で「侯爵夫人ミリエ・フォン・カルトヴァイス」の名で電話口に呼び出す。客たちの注目を集めはしたが、怖くなった相手の男はおばさんに知られないように逃げてしまう。

**神童にされた** (Einmal war ich Wunderkind) 11歳の主人公は、手紙の偽造によるずる休みが、想定外に1週間にもなり、行き場に困って美術館で過ごす。絵を見て恐ろしくて泣いていたところ、絵画の才能ある繊細な子だと注目され、ずる休みが親や学校に知れてしまう。

**大いなる情熱** (Die große Leidenschaft) 13歳の主人公は大恋愛に憧れる。オペラ歌手に惚れたと勘違いして告白に行き、妻がいたことを知る。見栄を張って、その歌手に会えたと嘘をついたところ、その噂が学校に知れてしまう。

どの話も主人公の振る舞いが大人の期待に反するところから事件に発展する。期待の裏切り方は、嘘をつく、正常な大人にはあり得ないような正直な発言をする、大人の真似をする、衝動に駆られて行動してしまう、といった型に分けられる。作品中の至るところで強調されるのは、主人公に悪意がないということである。個々の行動について、子どもなりの理由付けがなされ、良くないとわかっていることをしてしまった場合にも、主人公は例えば、「なぜいけないとされていることをしてしまったのかをちゃんと説明するなんて、そんなの絶対に無理」[39]で、「すべてが完全に成り行きで、わたしはただの道具だった」[40]と主張する。子どもである主人公の引き起こす数々の事件は、子どもの目線という一つの客観的視点で、大人の自分勝手さを浮かび上がらせる手段となっている。

なお最後の2つの物語でだけ主人公の年齢がそれぞれ11歳、13歳と紹介され、少し年長に設定されている。急に成長していて、この2篇でだけ年齢を示しているところが、他の10篇から浮き上がっている印象を与える。恋をしたと勘違いして大人扱いを求める13歳の主人公の、「わたしが3年後には結婚できる年齢となることを考えていただかないと」[187]という発言が彼女の意図に反して、まだまだ大人ではないことを物語るように、子ども時代が終わろうとする時点

までが描かれたとみなせる。

#### 4. 大人の社会の風刺

この小説における風刺を具体的に見てゆく。

コインの長編小説全般に当てはまることだが、脱線が非常に多い。初めの2篇から少し例を挙げると、「死」との関連で、飼っていたリスや年寄りの話が、葬儀への参列を許されなかったことを白状しようとしたこととの関連で、貯蔵瓶で毛虫を飼っているのを知られて叱られた話が、同級生に与えられそうな「勤勉札」との関連で、移し絵や中国の水中花をたくさん持っている話が、ヘンスヒェン・ラクスの子が教師だということとの関連で、教師でない自分の父親が癩癩を起こした話が語られる。脱線した内容は、基本的に1つの段落におさめられるが、度重なる詳しい挿話は読者に話の大筋を忘れさせかねない。

コインは処女長編小説『ギルギ』から、こうした脱線を多用し続けた。『女の子』では主人公の年齢が前2作の半分ほどに設定され、子どもらしい突飛な発想を表現する役割を果たす。それと同時に、信用のおけない子ども1人以外に語り手のいないこの小説では、物語の展開だけでは提示しがたい背景事情を読者に知らせ、読者が状況を客観的に判断できるようにする役割を果たしている。

脱線を繰り返すバランスを欠いた子どもっぽい語りは、そこで語られる大人の姿を、素朴な子どもとなにがしか思惑を抱いている大人という対比の下に浮かび上がらせる。

「わたしの最初の遺言」という、校長の死去をめぐる話で、担任が生徒たちに期待するのは、死を受け止めて、悲しみ、泣くことである。担任が教室で生徒たちにこの死を知らせる状況だけを切り出せば、担任のそうした期待は不自然ではない。実際、生徒たちの一部は、先生の期待を感じ取ってか、声を上げて泣く。<sup>31</sup>ところがこのクラスはまだ3年生で、長く患っていた校長を目にした憶えのある生徒すらほとんどいないらしい。つまり知らない人のために泣くことが強制される。主人公が盗み聞きする先生同士の会話では、雇用が継続されるかの心配や、重病だったから死んで良かったのではないかなど生徒たちに向けては語られない内容が話される。先生たちの受け止め方と、彼女たちが子どもに期待するそれは別ものである。帰宅した主人公が校長の死を報告すると、母親はまず死因を尋ねる。主人公は教室で死因を尋ねたがゆえに死者の冒瀆という罪を着せられたのであり、教室と家庭の対比は、大人にとって自然な振る舞いを子どもには禁ずる大人の身勝手さを浮き彫りにする。

ある一方に流されてしまう社会のあり方が、学校を舞台にして暴かれているともいえる。理

<sup>31</sup> Schüller, S. 315. 「先生が『死の尊厳』に言及すると、その言葉を受けて2、3の子どもたちが、パプロフの犬に似ていなくもないが、再度大げさに騒々しくすすり泣き始める」。

念に従わせようとする先生たち、その顔色を読み取る子どもたち、さらに葬式と結婚式の区別などなく、盛大なイベントがあると同じように感激してしまうミリエおばさん、それと権力者と従わされる国民、そして権力者を積極的に支持する国民の姿と重なる。おまけにこのおばは、参列者から排除された主人公を、その理由が自分たちと変わりのない発言であるということを一顧だにせず、一家の恥だと責める。まさに全体主義の縮図である。<sup>32</sup>

ここでは、大人をよく観察する主人公が、大人の常識に則って死因を問うことにより、大人の常識と子どもに期待される態度との差が顕在化し、<sup>33</sup> 結果的に大人の正しさが揺らぐ。この小説の風刺の基本的なあり方は、主人公が正しいというのではなく、何か正しいと作者から提示されることもなく、世の中のおかしさを明るみに突き出すものになっている。

主人公は大人を信用しない。弟を出産した母親を見舞いに病院へ行く場面で、大人に道を尋ねるが、「こういう大人が子どもに本当のことを言うことは絶対にならないと考えて」[53]、教わった方向と逆に進む。大人に反抗する主人公の姿勢からも、これは子どもを手段に大人を描く小説であるといえる。道を尋ねられた場合は大人も大抵は本当のことを教えるだろうが、大人が子どもに頻繁に嘘をつくのも事実であり、主人公の判断は一見もっともらしい。ただし子どもが騙されてくれるから嘘をつくのであって、騙されまいとする主人公の態度が子どものふりをしたひねくれものの大人である点は否めない。彼女はあるところの子どもの姿ではなく、大人のあり様を浮かび上がらせるために創作された子どもである。<sup>34</sup>

## 5. 女性嫌悪

主人公が女性に露骨な嫌悪感を示しているのが、コインの小説群の中でこの小説に特殊な側面といえるだろう。学校には先生も生徒も女性しかいないらしく、彼女の憎む担任や同級生が女性なのは当然だが、同居するおば、同級生の母親たち、自宅での雑談会に集まるおばさんたち、近所のレーヴェニヒ姉さん、アウエルバハから泊りに来たおば、といった女性たちに対しても、強い敵意と軽蔑が表明される。

それと対照的に、隣のクライネルツ氏が主人公にとって最も頼りになる味方であるばかりでな

<sup>32</sup> Ebd. 「(「大人はいっだって何をしてもよくて、子どもは何をしてもいけないのだ」[12] という) 子どもじみて反抗的なこの総括は、国民社会主義のドイツにおいて行為の自由裁量の余地が急激に変化しているという、著者が直面していた事態を、それとなく指摘するものと十分に理解し得る」。大人を国民社会主義の権力者、子どもをドイツ国民の寓意とする解釈には筆者も同感であるが、国民社会主義にこだわらず、より普遍的な指摘と受け止めたい。

<sup>33</sup> Ebd. 「何よりもこのエピソードは、この物語の主人公が至る所で直面することになる、大人と子どもとの間の不均衡な関係をユーモアたっぷりに明示する」。

<sup>34</sup> Ebd., S. 322. 「子どもの語り手は一般的に、読者が受け入れなければならない特殊な目線を提供する、作りものの人物である」。

く、男性全般に対して仲間意識や、敬意が伴う。暴走悪党団の三役のうち残る 2 人は男の子で、彼らについては特別にほぼ常にフルネームで言及される。<sup>35</sup> ちなみに悪党団の手下たちについては、名前も性別も明かされない。同級生や遊び友だちの父親たちはいたずらを大目に見てくれたり、むしろ感謝してくれたりする。森の監視員や戦争捕虜や兵隊とも親しくなる。

子育てを主体的に担わざるを得ない女性と、相対的にそれに無関心でいられる男性との立場の違いが、子ども目線での男女観に影響している側面は確かにある。女性たちは主人公の母親に対して、この子の躰への注文をつけたがり、男性たちは、そうした女性たちと役割を区別して、ありのままを受け入れる姿勢を示す。「優雅な人たちと馬糞」では、馬糞まみれの主人公を見て、ミッターダーク夫人がヒステリーを起こす一方で、ミッターダーク氏は意に介さず、主人公の父親が安堵する場面などその典型である。「神童にされた」では、美術館の監視員の男が、平日の午前 1 人で訪れた女の子を問いたださず、エジプトのミイラの解説をしてあげる一方で、老婦人はこの子の才能を伸ばしたいと考えて主人公の家まで押ししかけてくる。この老婦人のおせっかいがきっかけとなって、学校に親も呼び出され、やはり女性である校長に叱られる。そして一緒に叱られた同級生の父親が放課後に娘たちを迎えに来て、喫茶店でケーキを 1 人につき 5 つずつおごってくれる。男のアメと、女の教育的ムチがとてもはっきりしている。この小説での女性に対する否定感はいくこととどまらず、全面的である。

男女を対比して描かれている別の場面を挙げてみる。「暴走悪党団」で、頭蓋骨を投げ込まれた夫人は激怒するが、夫は「家内は縮み上がっていたぞ。お仲間全員にケーキを買ってやりな」[29] と言葉をかけて小遣いを渡す。亡命中は未発表の部分ではあるが、「わたしがバチルス保菌者だったとき」では、罹患して前線送りを逃れようとする兵士たちと、前線で活躍してもらわねばならない兵士たちを罹患させるわけにはゆかない、と考える母親とおぼとの間のせめぎ合いが描かれる。逆の話、つまり夫にいたずらした子どもたちに妻が褒美をやったり、前線に出ようとする兵士を女性が引き止めたりする話にもできるはずだが、この小説では女性は主人公の敵に位置づけられるのが基本となっている。

主人公が女性に嫌悪の念を、男性に信頼の念を抱いているのは、「新しい子ができた」に登場する、遊園地のような場所にある店について語る箇所からも明らかである。

---

<sup>35</sup> Kreis, S. 11ff. コインは誕生から 1913 年までベルリンに住んでいたが、ハンス・ヘルマン（愛称はヘンスヒェン）という同年の友だちがいて、コイン家が庭に建てられた安い建物（Gartenhaus）に最初住んでいたのに対して、彼は同じ場所の通りに面す側の建物に住んでいた。つまり彼の家はより上位の階層に属していた。主人公より下位のオットヒェン・ヴェーバーへの言及は、ヘンスヒェン・ラクスより圧倒的に少ない。2 人の名前がフルネームで言及されないのは、恐らく一箇所 [27] だけである。

あのお店の男は、女たちをノコギリで切り刻んでいる。ヘンスヒェン・ラクスは、自分に許されないことを信じようとしなかった。だけど、絶対に本当なのだ。わたしは店の男と話した。〈中略〉

わたしはその男に、もし晩にうちの通りに来て、レーヴェニヒ姉さんを真二つにしてくれたら、わたしの新しい地図帳とハルムダハおじさんの本物の銀の指輪をあげる、と言った。[51]

主人公は気軽に考えているが、これは殺人依頼である。彼に依頼する理由が、「女たちを」切っている男だからというものであるから、彼は女性の敵を代表させられている。主人公に女性一般への否定感がなければ、この依頼が行われるはずがない。そして男性に頼るのである。

ただし、家族については複雑な感情が入り混じり、性別では割り切れない。「新しい子ができた」で、「女の子はメスよ。動物の場合、立派なことを成し遂げるのは常にメスだってことを、わたしは理科で習って知っているのよ」[48]と女性を擁護して見せるが、これは跡継ぎとなるべき男の子の誕生に狂喜する父親への反発である。跡継ぎの男子というのはジェンダーに絡む問題ではあるが、弟妹の誕生によって兄姉がそれまでの特権的立場を喪失し不安になるのはふつうのことであり、ここではその漠然とした不安に跡継ぎということが一つのもっともらしい理由を付与している程度と理解して構わないだろう。この件へのわだかまりは大きく、不自然にも「新しい子ができた」と「わたしがバチルス保菌者だったとき」を除いて、弟への言及はほぼない。それでいて厳格な父親の親しみを持てる姿も描かれ、「新しい子ができた」では、主人公と一緒に水爆弾で遊んでくれる。父親の水爆弾がレーヴェニヒ姉さんに当たって主人公が喜ぶと、父親は「いやまあ、お父さんも嬉しいよ」[57]と言ってくれる。母親は主人公を庇い、主人公も母親に迷惑をかけまいと気を使う。ただしミリエお婆さんという母親のアルター・エゴがいて、<sup>36</sup> 母親が持つはずの負の側面がそちらに移されているからこそ、理想的な母親像が成立し得ている点は無視できない。

躰をめぐる男女の役割分担に触れたが、何かを強いることだけが導く方法ではない。ヒステリーを起こす女性たちと、教育の面に対極にあるのは、何度も登場するヘンスヒェン・ラクスの父親で、主人公は「優雅な人たちと馬糞」でも、以下のように評価する。

この人は、叩くことがほぼなくて、新聞を読み上げたりして、子どもには主に教育的

---

<sup>36</sup> Ebd., S. 36. ただし、アルター・エゴと断定する根拠を Kreis は示していない。コインにインタビューを重ね、人柄を知ったうえでの、直感的判断であるようだ。コインと彼女の母親との仲はどちらかといえば良好で、少し判断の難しい部分である。ちなみにコインにはこのようにお婆と同居した経験はない。

に働きかける。新たな罰を与えるよりも、そのほうがきっと子どものためにずっと良くて教育的だ。[131]

また「大いなる情熱」に登場する母親の遠いといこは、母親と並ぶ例外的な女性である。離婚後しばらく主人公の家に逗留し、やがて再婚で去るこの女性は、おしゃれで、男性を引き付ける魅力を持った人物として描かれている。主人公が彼女を評価するのは、「離婚」に象徴されるように、彼女が自立的で、梓にはめようとしなからで、女性への主人公の反発が、誰かに依存する姿勢と、寝しように迫ってくることへの反発にほかならないことを示している。

以上のように主人公は、女性でありながら一般的な女性に嫌悪し、むしろはみ出した女性や男性に居心地の良さを感じている。この子どもはアウトサイダーであり、そうであるがゆえに、ふだんは見逃されかねない事物が、異物として意識される。それが小説の随所に嵌めこまれた洞察のきっかけとなる。

＊

コインにおける女性に関して、もう一つ指摘しておきたいことがある。コインは1970年代の「再発見」以降しばらく、「新しい女性」の書き手としてもっぱらフェミニズムの立場から論じられたが、<sup>37</sup> コイン自身は女性を擁護する意図で執筆したわけではない。上述の離婚した女性のように、あるいはシングルマザーを選択した『ギルギ』のように、あるいはうすのろ男と一緒になることを選ぶ『真夜中過ぎ』のズザンネのように、好きにしない、というのがこの作家の基本的なメッセージだと読み取れる。

同世代のシモーヌ・ド・ボーヴォワール（1908-1986）と並べてみると、コインの立場がよく理解されるのではないだろうか。ボーヴォワールは第二次世界大戦後に『第二の性』（1949）を書いてジェンダー問題を世に知らしめたが、しかし彼女もコインと同様、女性であることに劣等感を抱いたり、女性であるがゆえの差別をうけた経験はなかった。この書の序文は次のように始まる。

私は長いあいだ女性についての本を書くことをためらってきた。この主題はいらだたしい、とくに女にとっては。それに新しくもない。<sup>38</sup>

---

<sup>37</sup> 『化繊』しか取り上げられていないが、女性解放の観点からコインを論じた典型的なものは次である。Viebrock, Katharina: *Von weiblicher Freiheit. Figuren bei Virginia Woolf, Irmgard Keun, Jean Rhys*. Königstein / Tanus 2002. ジェンダー研究であれば次を挙げることができる。論じられた4つの長編小説に『女の子』は含まれていない。Leirós, Carme Bescansa: *Gender- und Machttransgression im Romanwerk Irmgard Keuns. Eine Untersuchung aus der Perspektive der Gender Studies*. St. Ingbert 2007.

<sup>38</sup> ボーヴォワール『第二の性 Iー 事実と神話』（井上たか子、木村信子 監訳）新潮社 1997年、7頁。

しかし自由だと思っていた自分が、本当は社会によって女として規定されていたこと、すなわちジェンダー問題を発見したのが、ボーヴォワールが上の考えを改めてこの書を執筆したきっかけだった。このきっかけを欠いていたコインが、女性一般を擁護する立場の人たちをいらだたしく思ったことは不自然ではない。ヴァイマル共和国時代に彼女が描いた主人公たちは、解放を希求する女性たちにとって魅力あるものだったが、それとコインが女性嫌悪をあからさまにすることに矛盾はない。嫌な男からは離れればいい、一緒にいたくはない男との間に子どもができたならシングルマザーとして育てればいい、そうした感性がコインの文学にも実人生にも表れていて、その感性の下では大半の女性が疎ましい存在となり得る。

## 6. 戦争批判

『女の子』はナチス・ドイツでの出版を目指して執筆された小説であり、第一次世界大戦の時期が主な舞台でもあるので、明確なナチズム批判などは読み取り得ない。しかしそうではあるにせよ、戦争について否定的な姿勢を示す箇所は多い。

「暴走悪党団」に、下の階に将軍が住んでいる話が登場する。主人公は手下たちに下す命令を考えるのが煩わしくて、将軍の苦勞を思いやる。

わたしが将軍になったら、朝から晩まで兵士たちと何をしたらよいかわからないだろう。ひょっとすると将軍にもわからなくて、それで殺し合いをさせるのかも。クライネルツさんも言っていた、将軍たちはいつも戦争をしたがっていて、戦争に負けたときに初めて平和を望み、隠居してバラを育てる、と。[19]

戦争を指導する人間への皮肉だが、子どもの口を借りて、その意味するところを十分に自覚することなく発せられているという前提により、陰険な印象が和らぐ。

コインは将軍と、その手駒となる兵士たちをはっきり区別して描く。「皇帝への手紙」には戦争に関わる話題が多いが、そこに旅館で働く戦争捕虜が登場する。主人公と言葉が通じないのでこの兵士かは不明である。主人公は旅館の奥さんに頼まれてコーヒーを届ける。この小説でほぼ唯一この場面だけが感傷に満ちた、違和感のある描写で、敵兵への共感を読者に求めている。

わたしはコーヒーを手にして立った。空は広く青く、野原ははてしなく褐色だった。鳥は1羽も飛ばなくて、わたしは捕虜と全くの2人きりだった。その人の帽子は地面に置かれ、髪の毛はしおれた草のように風になびいた。家に帰りがっていた。絶対に家に帰りがっていた。何も言わなかったけれど、絶対に家に帰りがっていた。

外国の人だもの。[72]

会話は何もないが、気持ちを通じたかのように、捕虜は主人公に象牙の十字架を贈る。この話に続いて語られるのは、孤児だった兵士たちのことである。学校で戦地に小包を送る機会があつて、その相手が彼らだった。兵士は絵葉書を描いて送ってくれるのだが、「複数の戦車に鉄条網をめぐらせた山々に有刺鉄線だらけの野原の絵」[74]であり、敵兵の捕虜のときと同じく、家に帰らせてあげたいと主人公は願う。主人公の思いやりに、敵味方の区別は全くない。

戦争を止めてもらいたいと皇帝にお願いをするとき、主人公は食糧難を理由に挙げる。身近な人たちの戦死を知らなくはないが、幼い主人公には実感がなくからである。

お母さんは立っている。お母さんの兄弟は皆死んで倒れてしまった。わたしはその人たちに会ったことがない。[65]

会った記憶のない人たちは、主人公にとって亡くなった校長と同じで、親しみや悲しみを抱くことのできる対象ではない。銃後で感じ取れる戦争は、食糧不足と代用食という不自由さである。食糧難への言及は多く、もちろん戦後も続く。

かつて平和だった頃、お父さんはうちの通りくらい大きくて、大聖堂のように高い船でアメリカに行ったことがある。そのときはいつでも好きなだけ、一日中食べることができた。〈中略〉サッカリンでなく本物の砂糖のタルトがあつた。[65f.]

クライネルツさんは、平和なときには欲しいだけ白パンがあつて、お店に行きさえすればよかった、と話してくれた。子どものころは皆いつも白パンをミルクにひたして食べていた。それで病気になるわけじゃないのだから、わたしもやってみたい。[71]

皇帝がこの子の手紙をいかなる表情で読むのか、読者の興味をかき立てるところだが、主人公に皇帝を糾弾する意図はない。コインが帝国著作院に加盟できていたとして、この小説の出版が許可されたかどうかは疑問であるが、彼女は際どいレベルで戦争批判を盛り込んでいるのである。

## おしまいに

ナチス・ドイツ下での出版を念頭に執筆された『女の子』は、亡命中に出版された作品ではあるのだが、基本的には亡命文学に含まれない。そのためこの小説は亡命文学研究において軽く

扱われてきた。それでは当時の政治的な事柄から目を背けているのかというと、明らかにそうではない。亡命文学という分類から外す判断は、出版の事情からなされるもので、この作品の政治性を評価し、出版の時期も考慮すれば、亡命文学に含めても差し支えないだろう。

女性を嫌悪する女の子というアウトサイダーの視点で語られるこの小説では、世の中のほころびが可視化される。子どもの世界観は大人の安直さを浮かび上がらせる。それは子どもらしさの強制であったり、大人が子どもにつく様々な嘘であったり、事実と嘘の取り違えであったり、冠婚葬祭でも戦争でも平和でも様な大人たちの興奮であったり、身の程知らずの願望であったりと種々雑多であるが、そこに全体主義批判や戦争批判が浮き上がるところに、亡命するかどうかの瀬戸際にあった作者の執筆意図が見て取れる。

コインの亡命小説を代表するのは『真夜中過ぎ』と『万国の子』の2作品だが、それぞれナチス・ドイツでの生活と亡命生活というアクチュアルな設定を盛り込んでいるというだけで、風刺の中身は『女の子』と本質的に大差ないと筆者は考えている。それについては稿を改めることとしたいが、この『女の子』が幼い子どもが主人公という設定から期待されるような、現実から目を背けた無難な文学作品ではなく、社会風刺に満ちている作品であるということは重ねて強調しておきたい。

『女の子』には、子どもの知的レベルで語られているという前提があり、手厳しい批判も舌足らずな語りでなされる。風刺を意識しなければ、ただの娯楽小説ともみなし得る。逆に、娯楽小説として読んでいるうちに、いろいろ気付かされる作品ともいえる。戦後のドイツで受け入れられ、最もよく読まれているコイン作品となり得た理由はそこにあるだろう。社会に対しこのように反抗的な物語を、それもファシズム国家を成立させてしまう社会を描いたともいえるものを、広く長く愛される作品に仕立て上げたコインの技量は注目に値する。2つの世界大戦が遠い過去となった今、『真夜中過ぎ』のように定評はあるがナチズム批判として読まざるを得ない作品よりも、この『女の子』のように、子どもたちにも読み易い、普遍的な外見の小説こそが、全体主義に抗する批判精神の涵養に貢献し得るのではないだろうか。

## Ein ungehorsames Kind

— Überlegungen zu Irmgard Keuns Roman

*Das Mädchen, mit dem die Kinder nicht verkehren durften* —

TAKEDA Yoshiki

Das Thema der vorliegenden Abhandlung ist Irmgard Keuns Roman, *Das Mädchen, mit dem die Kinder nicht verkehren durften* (1936). In den bisherigen Forschungen zum Werk der Autorin hat er nur wenig Beachtung gefunden, weil diese sich hauptsächlich auf ihr Schaffen in der Zeit der Weimarer Republik oder dann im Exil nach 1933 konzentrierten. Zu bedenken ist aber, dass der Roman nicht nur im Dritten Reich geschrieben, sondern nach dem Willen der Schriftstellerin auch dort publiziert wurde, allerdings erst, nachdem Keun selbst sich bereits im Exil befand.

Weil der Roman streng genommen nicht eigentlich zur Exilliteratur gehört, und weil seine Hauptfigur ein Kind ist, dessen enge Welt in einer vergangenen Zeit beschrieben wird, wurde er – sehr zu unrecht – als unpolitisch und unwichtig etikettiert, und in mehreren Abhandlungen, die fast jedem der Romane Keuns ein Kapitel zuteilen, einfach übergangen. Mag er auch auf den ersten Blick aufgrund der ihm innewohnenden Komik und bewusst integrierten Kindlichkeit als unpolitisch erscheinen, so ist er doch, wie ich in dieser Abhandlung zu zeigen versucht habe, ein durch und durch satirischer Roman und eine aktuelle Auseinandersetzung mit der Zeit des Nationalsozialismus dazu.

Analysiert werden von mir dabei in erster Linie die satirischen Aspekte dieses Romans, die man unter drei Gesichtspunkten aufzeigen kann, und zwar am Beispiel kindlicher Umwege, kindlicher Aussagen und schließlich der misogynischen Gedanken der Protagonistin. Dieses frauenfeindliche Mädchen ist quasi eine Außenseiterin, die aber gerade deswegen manches viel deutlicher als die meisten Frauen oder Erwachsene überhaupt verstehen kann. Ein kleines Kind zu sein hat auch große Vorteile, und erst die Umwege des kindlichen Erzählens klären die wahren

Hintergründe einer Episode auf, und lassen den Leser verstehen, wie komisch Erwachsene Kindern oft erscheinen. Erwachsene zwingen Kinder oft zu allem Möglichen, was sie selbst niemals machen würden: Die Protagonistin und andere Kinder sollen zum Beispiel aus Anlass des Todes ihrer Schulleiterin Tränen vergießen, obwohl so gut wie keines der Kinder sie überhaupt näher gekannt hat, eine Episode, die als Allegorie auf die totalitäre Gesellschaft zu lesen ist. Die unbedachten Aussagen eines Kindes bedeuten oft mehr als wörtliche Bedeutungen oder ganz andere.

Die als kleines Mädchen beschriebene Figur wird schließlich zur Anklägerin gegen die Gesellschaft der Erwachsenen. Zwar wird im Roman weder das Dritte Reich noch der Nationalsozialismus beim Namen genannt, aber der hier beschriebene Erste Weltkrieg mit dem daraus resultierenden Elend weist deutlich genug darauf hin. Einfach deshalb, weil Keuns Buch keins im vorgegebenen Sinne des Wortes ist, darf man es jedoch weder unterschätzen noch links liegen lassen. Dieser Roman für Kinder hat inzwischen mehr LeserInnen, besonders junge Leute gefunden, als ihre anderen Romanen. Er ist ein gutes Vorbild von über Politik kritischen Romanen.